

特別講演 2

無意識の探求—千里眼事件に関連して

杉下 守弘
特別名誉会員

19世紀になると「我々が気付いている、意識している精神活動」以外に、「無意識の精神活動」が存在するという考えは承認されるようになってきたと言われている。なお、「無意識の精神活動」がある根拠としては、睡眠中に問題が解決されることなどがあげられる。

1. 無意識研究への実験的アプローチ

1850年頃になると無意識研究への実験的アプローチが始まる。例を挙げると、ヘルムホルツ（1859）は無意識的推論の存在を発見した。ヒトは、この対象はこうでなくてはならないと思い込んでいる通りに知覚するという。また、アッハは思考や意志では無意識の決定傾向が関与していることを示した。この分野の発展が認知神経科学の未来を豊かにする可能性がある。

認知神経科学での無意識の精神活動の研究としては、盲視や左側片麻痺の無視など「自分が意識しているはずなのにそうでないとか、ある症状を意識してないといった現象」や分離脳の右半球は意識があるのかなどが研究されてきただけである。認知神経科学は、今後、無意識の精神活動も対象にする必要があると思われる。

2. 臨床的アプローチ

無意識の探求には実験的アプローチ以外に臨床的アプローチがあり、既に18世紀から行われてきた。臨床的アプローチには精神療法、ヒステリー研究などがあるが重要なのは催眠術である。催眠術下において、抑圧され意識に上らない不安を明らかにすることによって、神経症を治療された。また、催眠術下の暗示によって、悪癖の矯正や身体的苦痛を取り除くことに成功した。

西洋では1880年（明治13年）頃からシャルコーなどによって催眠術の臨床研究が盛んになり、日本では明治30年以来盛んになった。昭和40年代には、成瀬吾策の催眠下の知覚実験や催眠の臨床活動によって、催眠術は盛んになった。演者は催眠術の問題点は催眠状態の客観的指標がないことであると考え、角辻豊先生の指導の下で自己催眠の生理的指標を明らかにするため、頤筋の筋電図を研究した。

3. 千里眼事件

明治43年（1910）、東大福来友吉、京大今村新吉教授などが、催眠術で千里眼（透視）が可能になったという三船千鶴子と、予言が的中するという長尾郁子を研究し、透視が可能であることを確かめたという。また、長尾については念写が可能であることを確かめたという。これらの報告およびそれらに対する賛否両論が連日、新聞に書き立てられた。この事件について、催眠術および透視の研究の現状から論評したい。透視についてはライン博士の研究をどのように評価するかが重要と考える。また、大谷宗司先生の意見を紹介したい。催眠術については、催眠状態の客観的指標の確立が喫緊の課題である。